

《資料紹介》

伝・將軍山古墳出土の朝鮮三国時代加耶系陶質土器について —明治大学博物館所蔵資料の紹介—

高久 健二*・佐藤 康二

*専修大学・史跡埼玉古墳群総括報告書刊行委員会委員

はじめに

埼玉県立さきたま史跡の博物館では、2015年度(平成27年度)から、『史跡埼玉古墳群総括報告書Ⅰ』の刊行作業を進めている。この報告書は1968年度(昭和43年度)の稻荷山古墳の発掘調査から、およそ半世紀を迎えた現在、埼玉古墳群の多くの調査・研究成果を今日的な視点で取りまとめ、今後の教育、学術研究に資することを目的としたものである。

さて、その一環として埼玉古墳群出土資料の再点検を行っている中、明治大学博物館に伝・將軍山古墳出土資料が存在することが判明した。結果的には將軍山古墳出土と断定する確証は得られなかつたが、本資料は、寄贈間もないことから今までほとんど知られておらず、さらには、朝鮮三国時代の貴重な資料であることから、今回資料紹介を行うこととした。

なお、本資料紹介については、所蔵している明治大学博物館に快く御承諾を頂き、合わせて図化、撮影等につきましても全面的な御協力を頂いたことを記して感謝いたします。

1 資料の由来

2010年(平成22年)、前場幸治氏から明治大学に一大コレクションが寄贈された。この総数1万点におよぶ瓦を中心とした資料群の中に、瓦以外の考古資料が約1千点あり、縄文時代の土器、石器から近代陶磁器まで多岐に渡っている。その中に「伝埼玉県將軍塚古墳」の長頸壺が含まれていた(森本・忽那・山路2014)。

この資料は瓦資料などとともに氏がコレクションを公開していた厚木市の前場資料館でも展示されていたとのことである。なお関連する付属品や出所を示す注記等の手掛かりはまったくなかった。前場幸治氏は2011年(平成23年)に他界されており、入手時期・方法等の詳細はわらないのが残念である。

2 記録に残る將軍山古墳出土品について

將軍山古墳は1894年(明治27年)に地元有志により石室内の発掘調査が行われた⁽¹⁾。発掘調査から11年後に地元関係者に聞き取り調査を行った記録が残っている。それについては、既に詳しく論じられており(埼玉県教委1997)、本紀要に掲載の別資料紹介でも詳細に触れているので、ここでは土器についてのみ、触れておく。

「高坏は(中略)。土器は此物の他には何物の存せざりしとの事なり。」(柴田1905)

また、同論文の遺物一覧表にも「祝部高坏 1」と記述されている。この高坏とは、現在東京国立博物館が所蔵する長脚二段三方透かしの須恵器高坏で、TK43型式相当と比定されている。なお本資料は口縁部の欠損した部分が、1991年度(平成3年度)の石室調査で出土した破片と接

合したことからも、将軍山古墳に帰属することは確実である。

ちなみに将軍山古墳の墳丘くびれ部からは、計4点の埴が出土しているが、高坏より古相であり須恵器編年のTK10型式新段階まで遡るものとして、多くの研究者が指摘している(酒井2014)。したがって、埴が初葬時、高坏が追葬時のものとも推定されている。ただし、初葬時に土器を石室内に持ち込まず、追葬時にのみ副葬することへの疑問も呈されている(藤野2016)。

なお本古墳の名称は、もっとも古いもので1829年(文政12年)の『新編武藏風土記稿』の「忍城之図」では「將軍塚古墳」と記される。前掲柴田論文では「將軍塚は一に將軍山とも称し」、(柴田1905)、1907年(明治40年)は「將軍塚」(清水1905)、1936年(昭和11年)は埼玉村長から埼玉県への文書の中とでは「將軍山」とされるように両呼称が使用されているが、1938年(昭和13年)の国史跡に指定される際の名称が「將軍山古墳」となったことにより、公式な名称として認知された。

したがって、古墳名称から指摘できることとしては、本資料は「將軍塚古墳」と呼称された時期に収集家や古物商等が入手した下限だとすると、1938年以前に世に出た可能性がある⁽²⁾。

3 伝・將軍山古墳出土の長頸壺(第1図)

口縁部径12.7cm、胴部最大径27.6cm、器高37cmの完形品である。色調は褐灰色から黒褐色であり、肩部の自然釉部分には光沢がある。器形はごくわずかに内傾して立ち上がる筒状の頸部から、くの字に屈曲する口縁部からなる。口唇部端面はやや丸みを帯びる。胴部は最大径を中位にもち球状となる。底部中央は2mmほどくぼむが、安定して自立する(第1図5)。口縁部は内傾し、口縁部から頸部下端までを突帶により3帯に区画する。突帶は上から1、2、2、1条で構成され、各区画帶には櫛描波状文が施文される(第1図3)。櫛歯状工具は6歯／1cmであり、俯瞰した場合、反時計回りの施文である。第1帶は上下に2回施文、第2帶は1回施文、第3帶は2回施文である。波状のピッチは狭い部分が多く、施文が不鮮明な部分も多い。全体的にやや粗い施文ともいえる。

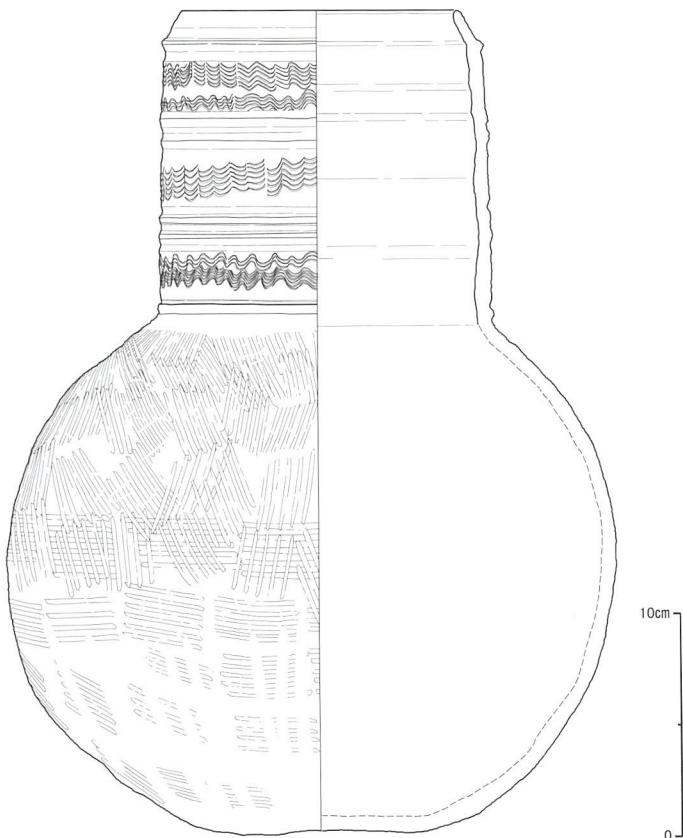
胴部調整は、平行タタキ目が残る(第1図4)。肩部最上位は、ほぼ縦位のタタキ目が残るが、その直下から胴部最大径までは原則右下がりのタタキ目となる。胴部最大径付近からは横位のタタキ目が、上位の縦位タタキ目の下に観察された。また、胴部下位には、指頭あるいは布等により幅5mm程度の縦位のナデがやや間隔をあけて施されている。底部はナデ調整で仕上げられている。

胴部内面は実測道具が入らず破線としたが、キャリバー計測の数値からは、器壁は1cm未満で、頸部から胴部上位は概ね5～7mmと薄く仕上げられている。

胎土には半透明の黒色粒子が少量、透明黒色粒子が微量、半透明白色粒子が少量観察されたが、完形品のため、胎土内の含有物は外面観察のみの所見である。

4 伝・將軍山古墳出土長頸壺の類例

伝・將軍山古墳出土の長頸壺は朝鮮三国時代の陶質土器であり、そのなかでもとくに半島南部を中心に展開した加耶諸国の土器と関連するものと考えられる。加耶諸国は原三国時代の弁



1.実測図



3.頸部波状文写真



4.胴部タタキ目写真



2.全体写真



5.底部写真

第1図 伝・將軍山古墳出土長頸壺

韓諸国をその前身とし、洛東江流域から蟾津江流域にかけて小国が分立していた。これら加耶諸国は、3～4世紀代は洛東江下流域の金官加耶を中心に展開し、5世紀以降は洛東江中流域の大加耶が勢力を拡大していく。伝・將軍山古墳出土長頸壺はその特長からみて、加耶諸国の中でも大加耶の土器と類似する。大加耶の中心地は、現在の韓国・慶尚北道高靈郡であり、池山洞古墳群は大加耶の中心古墳群(王墓群)であると考えられている。大加耶系土器は高靈地域を中心に分布するが、大加耶の勢力拡大とともに半島西南部にも拡大し、在地の土器と融合して変容した形態も存在する。

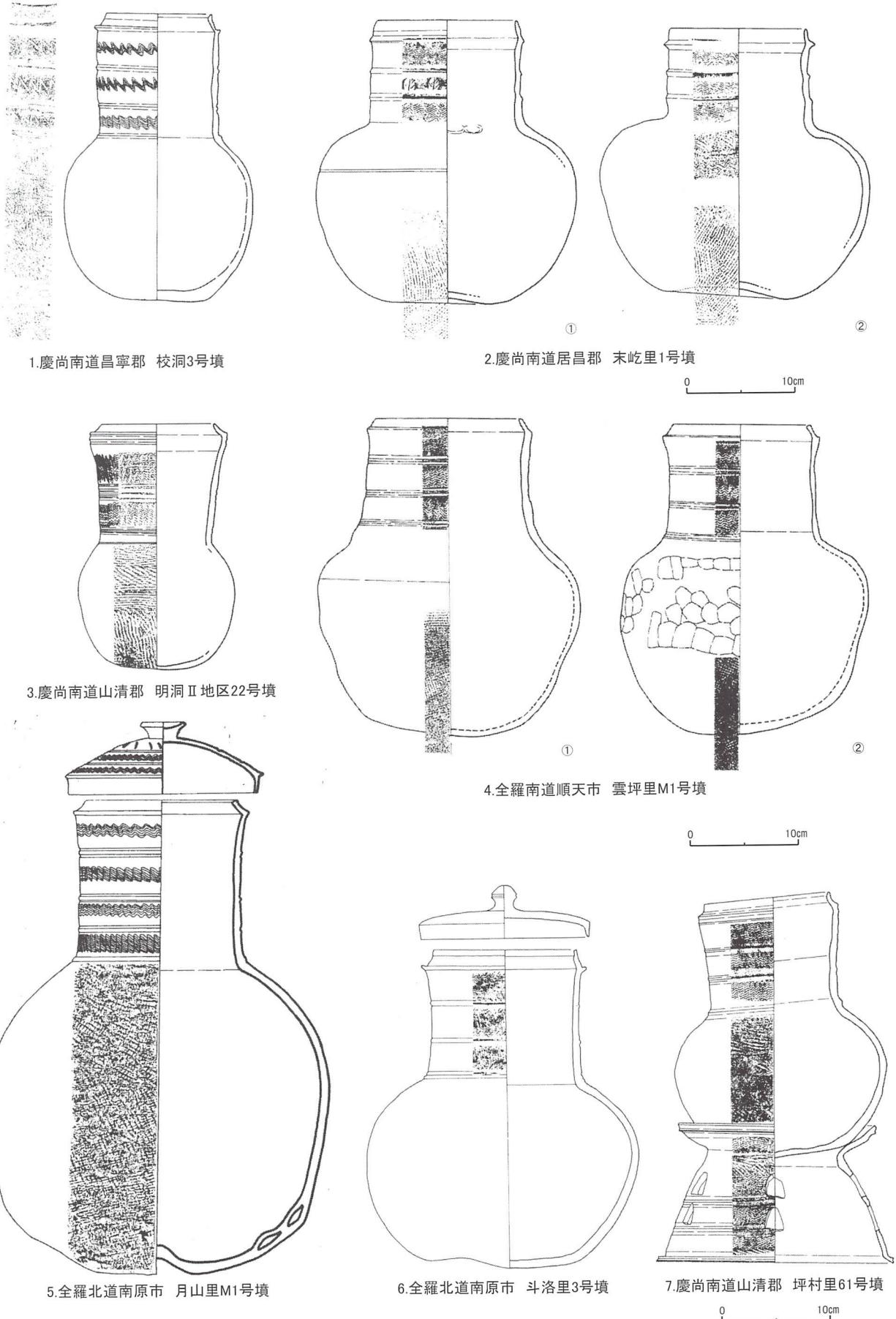
伝・將軍山古墳出土の長頸壺の特徴をあらためて整理してみると、以下のとおりである。

- ①口縁部下に受け部をもつ、いわゆる有蓋長頸壺であるが、受け部は突帶状に形骸化し、蓋もともなわない。
- ②頸部は直線的に立ち上がり、わずかに内傾する。
- ③頸部は低い突帶によって3段に区画され、各区画に粗い波状文を施文する。
- ④胴部は球形を呈し、胴部最大径は中位にある。
- ⑤胴部は平行タタキによって調整され、タタキ目が残る。
- ⑥底部はやや内側にくぼんでいる。
- ⑦色調は褐灰色から黒褐色であり、肩部には自然釉がかかる。

以下では、伝・將軍山古墳出土の長頸壺と形態的に類似するものをとりあげて、出土古墳の概要と土器の特徴を整理したうえで、比較・検討してみる。

校洞3号墳(慶尚南道昌寧郡)は円墳(直径25m)であり、埋葬主体部は加耶地域で初期段階の横口式石室(長さ720cm、幅130cm、深さ220cm)である(シムボンゲンほか1992)。石室内は盗掘を受けていたが、装身具類、鉄製武器・農工具類、甲冑、馬具類、土器類など多くの副葬品が残されていた。有蓋長頸壺は5点が出土しており、そのうちの1点は頸部が垂直に立ち上がり、内傾する口縁部の直下に受け部がつく(第2図1)。頸部はシャープな突帶によって3区画に分けられ、波状文が施文されている。胴部は球形を呈し、表面はナデ調整されているが、タタキ目が若干残っている。色調は黒灰色を呈し、焼成は極めて良好で表面にはメタル光沢をもつ典型的な昌寧系土器の特徴を有する。器高は25.3cm、口縁部径は9.5cmである。

末屹里1号墳(慶尚南道居昌郡)は竪穴式石槨墓(現長470cm、幅97cm、深さ140cm)であり、鉄鎌、鉄刀子、鉄鎌、鉄斧などの鉄器類と土器類が副葬されていた(国立晋州博物館1985、リュチャンファンほか2012)。長頸壺は7点が副葬されていたが、そのうちの1点は、頸部がほぼ垂直に立ち上がり、二条の突帶によって3区画に分けられ、上段と下段には波状文を、中段には葉文を施文している(第2図2①)。胴部は扁球形を呈し、上部には1条の沈線をめぐらし、下部には平行タタキが残る。底部は内側にくぼんでいる。色調は暗灰褐色であり、胎土には砂粒が多く混入されている。器高は25.8cm、口縁部径12.4cmである。もう1点も頸部が直線的に立ち上がり、二条の突帶によって3区画に分けられ、各区画に波状文を施文する(第2図2②)。胴部は最大径が上部にあり、胴下部には平行タタキがみられる。底部は内側にくぼんでいる。色調は淡灰紫色であり、胎土には砂粒を多く含んでいる。器高は24.6cm、口縁部径は12.2cmである⁽³⁾。



第2図 大加耶系長頸壺

明洞Ⅱ地区22号墳(慶尚南道山清郡)は堅穴式石槨墓(長さ310cm、幅75cm、深さ85cm)であり、鉄鎌、有蓋高坏、長頸壺が副葬されていた(イヨンジュほか2004)。長頸壺は3点が副葬されていたが、そのうちの1点は頸部が直線状を呈し、上部にあがるにつれ若干広がっている(第2図3)。頸部は低い突帯によって2段に分けられ、波状文を施文する。胴部は球形を呈し、上部にはカキ目をめぐらすが、下部には平行タタキが残る。色調は灰青色であり、胎土には小砂粒が少量混入されている。器高は22.5cm、口縁部径は10.4cmである。

坪村里61号墳(慶尚南道山清郡)は堅穴式石槨墓(長さ340cm、幅65cm、深さ94cm)であり、鉄鎌や鉄斧などの鉄器類と蓋坏、短頸壺、長頸壺、器台などの土器類が出土した(パクサンオンほか2007)。長頸壺は3点あり、そのうちの1点は器台とセットをなす(図2-7)。頸部は直線的であり、突帯によって3区画に分けられ、波状文が付されている。胴部は扁球形を呈し、平行タタキが残る。色調は灰黒色である。器高は24.4cm、口縁部径は11.5cmである。

雲坪里M1号墳(全羅南道順天市)は円墳(直径9m)で、埋葬主体部は中央に主槨(堅穴式石槨:長さ430cm、幅80cm、深さ90cm)があり、その周囲に4基の小石槨がめぐらしている(イドンヒほか2008)。主槨内には、鉄斧、鉄鎌、鉄刀子、鉄鏃などの鉄器類と短頸壺、平底鉢、長頸壺、器台、高坏などの土器類が副葬されていた。長頸壺は5点が出土しており、4点は器台とセットをなしている。そのうちの1点は、頸部が若干湾曲しながら内傾して立ち上がり、突帯によって3区画に分けられ、各区画に波状文が施文されている(第2図4①)。突帯は極めて低く、二条の沈線状を呈している。胴部は最大径が上部にあり、下部から底部にかけて格子目タタキが残存する。色調は灰青色であり、胎土には砂粒が混じる。器高は29.4cm、口縁部径は15.3cmである。もう1点は頸部がほぼ垂直に立ち上がり、前者と同様に低い突帯によって3区画に分けられ、波状文が施文されている(第2図4②)。胴部は球形を呈し、上部には指頭圧痕とケズリの痕跡が、下部には格子目タタキが残る。色調は灰青色であり、胎土には砂粒が含まれている。器高は28.6cm、口縁部径は12.8cmである⁽⁴⁾。

月山里M1号墳(全羅北道南原市)は円墳(直径19m)で、中央に大型堅穴式石槨(M1-A号石槨:長さ8.6m、幅1.36m、高さ1.85m)があり、その南側や西側に堅穴式石槨(M1-E・G号石槨)や石棺(M1-B・C・D・F号石棺)が配置されている。中央のM1-A号石槨には、鉄製武器・武具・農工具類、馬具類、土器類などが副葬されていた(チョンヨンネ1983)。長頸壺は7点が出土し、そのうちの1点は有蓋長頸壺である。頸部がほぼ垂直に立ち上がり、口縁部が内傾する。頸部は突帯により4段に区分され、各区画に波状文を施文する(第2図5)。胴部は球形を呈し、表面には格子目タタキが残り、底部はくぼんでいる。色調は暗灰色を呈する。器高は43.8cm、口縁部径は14.5cmである。

斗洛里3号墳(全羅北道南原市)は堅穴式石槨墓(長さ5.1m、幅1.0m、深さ1.57m)であり、おもに土器類が副葬されていた(ユンドクヒヤンほか1989)。長頸壺は4点が出土しており、いずれも蓋をもち、器台とセットをなしている。そのうちの1点は頸部がやや湾曲しながら垂直に立ち上がり、口縁部が内傾し、その下に受け部をもつ(第2図6)。頸部は突帯によって3区画に区分され、波状文が施文されている。胴部は扁球形を呈し、底部はややくぼんでいる。器高は28.2cm、口縁部径は13.7cmである。

以上、伝・將軍山古墳出土の長頸壺と形態的に類似するものをとりあげて、その特徴について整理してみた。このうち校洞3号墳出土のものについては、形態的な類似点もみられるが、突帯と波状文の精緻さや色調・焼成がまったく異なっている。昌寧系土器は洛東江東岸様式に属し、二段高坏は交互透孔をもつなど新羅土器との共通性がみられる。また、校洞3号墳の築造時期は5世紀中葉と推定され、將軍山古墳よりもかなり古いものであることから、直接的な関係を想定することは難しい。したがって、伝・將軍山古墳出土の長頸壺と関連性があると考えられるものは、雲坪里M1号墳、月山里M1号墳、斗洛里3号墳出土の長頸壺であり、つぎに検討するように時期的にも將軍山古墳の築造年代と比較的近い。

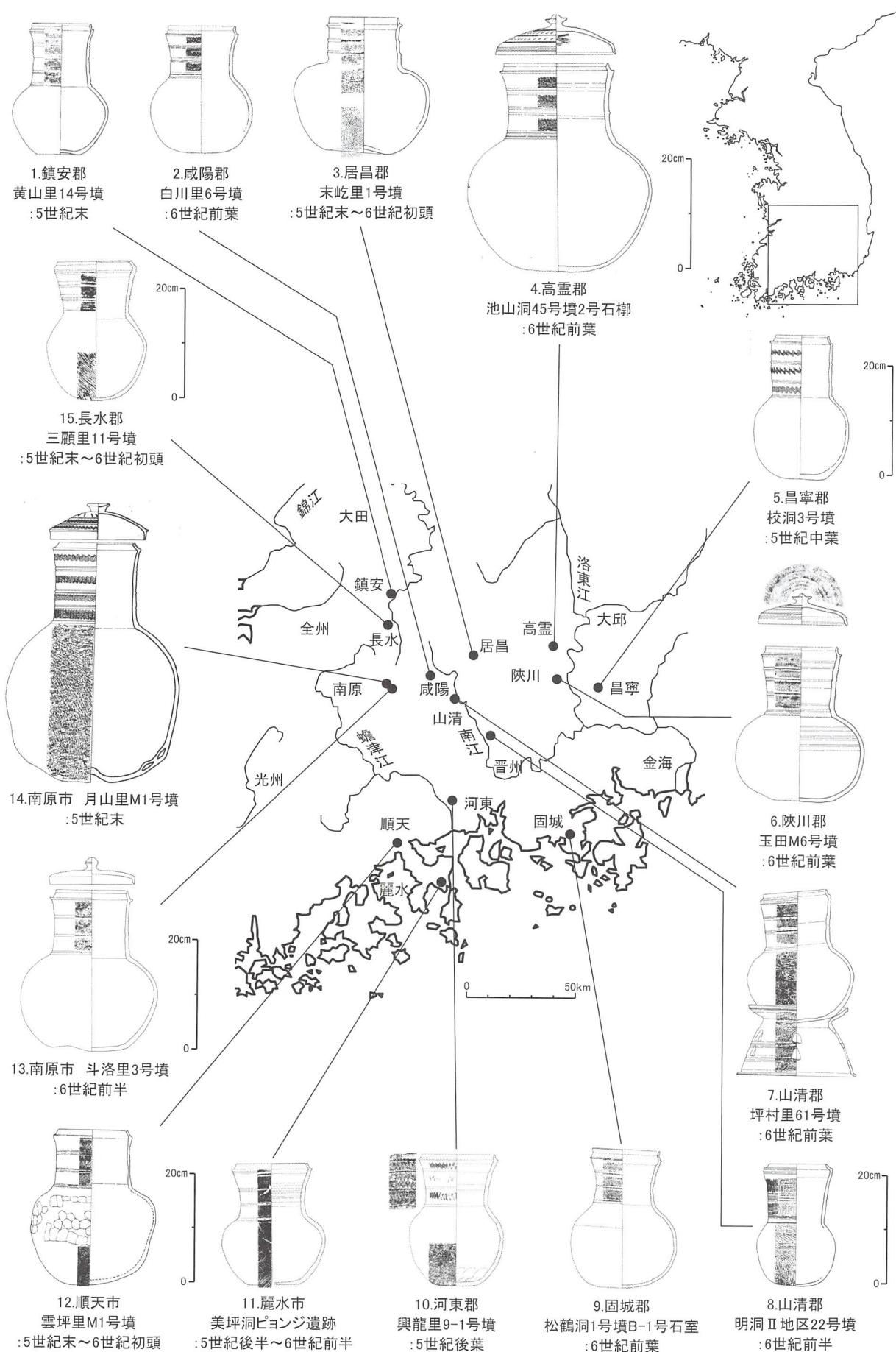
5 伝・將軍山古墳出土長頸壺の系譜と歴史的意義

大加耶系土器に関しては、これまで日韓において多くの研究の蓄積がある。とくに編年研究については、1980年代からおこなわれはじめ、中心地である高靈地域における土器編年(ウジナム1987、定森1987、郭鍾喆1988)、周辺地域における土器様式の地域色と高靈地域との併行関係などが明らかにされている(イヒジョン1994、パクチョンス1998、キムドウチョル2001、パクスンギュ 2003・2010)。また、日本出土の大加耶系土器から日韓の古墳編年の併行関係についても検討されている(白井2003)。

これらの先行研究をもとに、まず伝・將軍山古墳出土長頸壺の系譜について考察してみる。大加耶の中心地である高靈地域の長頸壺は、池山洞45号墳出土品(第3図4)のように、頸部が湾曲して外反するものが一般的であり、胴部も球形ではなく、最大径が上位にあるものが多い。また、胴部に平行タタキが残るものも少ない。伝・將軍山古墳出土の長頸壺のように頸部が直線状を呈するものは、洛東江流域の高靈地域や黃江流域の陝川地域(第3図6)ではみられず、居昌郡末屹里古墳群(第3図3)、順天市雲坪里古墳群(第3図12)、南原市月山里古墳群(第3図14)、南原市斗洛里古墳群(第3図13)などのように高靈地域の南西側の地域で出土している。そのなかでもとくに南原・順天地域など蟾津江流域で出土している大加耶系土器と類似しているといえる。これらの地域では大加耶系土器と在地系土器が共伴して出土し、大加耶系土器も中心地である高靈地域のものとは異なり、変容した形態のものが存在する。

つぎに、伝・將軍山古墳出土長頸壺の年代的位置づけについて検討してみる。大加耶系土器に関するこれまでの編年研究をみると、大加耶の中心古墳群である池山洞古墳群の相対編年については、池山洞35号墳→池山洞32号墳→池山洞44号墳→池山洞45号墳という築造順序でほぼ意見が一致している。周辺地域との併行関係については、末屹里1号墳と月山里M1号墳が池山洞44号墳段階に、坪村里61号墳が池山洞45号墳段階に、雲坪里M1号墳が池山洞44~45号墳段階に、明洞Ⅱ地区22号墳と斗洛里3号墳が池山洞45号墳段階の次の段階にほぼ該当するものと考えられる。ちなみに、池山洞45号墳段階の次の段階とは水精峯2号墳・玉峯7号墳(慶尚南道晋州市)段階である(閔野ほか1916、定森・吉井・内田1990)。

これに対し、絶対年代の比定については研究者ごとに違いがみられる。これまでの見解を整理すると、①池山洞35号墳段階を5世紀第1四半期、池山洞32号墳段階を5世紀第2四半期、池山洞44号墳段階を5世紀第4四半期、池山洞45号墳段階を6世紀第1四半期、水精峯2号墳・



第3図 大加耶系長頸壺の分布（5世紀後半～6世紀前半）

玉峯7号墳段階を6世紀第2四半期とする見解(イヒジュン1994、パクチョンス1998)、②池山洞35号墳段階を5世紀第2四半期、池山洞32号墳段階を5世紀第3四半期、池山洞44号墳段階を5世紀第4四半期、池山洞45号墳段階を6世紀第1四半期、水精峯2号墳・玉峯7号墳段階を6世紀第2四半期とする見解(パクスンギュ2010)、③池山洞35号墳段階を5世紀第3四半期、池山洞32号墳段階を5世紀第4四半期、池山洞44号墳段階を6世紀第1四半期、池山洞45号墳段階を6世紀第2四半期、水精峯2号墳・玉峯7号墳段階を6世紀第3四半期とする見解(キムドウチョル2001)に分かれる。①と③では最大で約50年の違いがみられるが、③は埼玉古墳群の稻荷山古墳の年代が「辛亥年」(471年)よりも大きく下るとする見解でもあり、池山洞44号墳段階がTK47型式、池山洞45号墳段階がMT15型式と併行するとみる日本の編年観とは大きく異なっている(白井2003)。したがって、①と②の見解に従うならば、末屹里1号墳と月山里M1号墳を5世紀第4四半期、坪村里61号墳を6世紀第1四半期、雲坪里M1号墳を5世紀第4四半期～6世紀第1四半期、明洞Ⅱ地区22号墳と斗洛里3号墳を6世紀第2四半期に比定することができる。つまり、伝・將軍山古墳出土の長頸壺の年代もおよそ5世紀第4四半期～6世紀第2四半期に位置づけることができるだろう。

最後に、伝・將軍山古墳出土長頸壺の歴史的意義について考察してみる。前述したように、残念ながら本資料は確実に將軍山古墳出土品であるとは断定できない遺物である。したがって、以下の考察は、あくまでも本資料が將軍山古墳出土品であると仮定した場合の解釈であることをことわっておく。前述したように將軍山古墳はTK10型式新段階⁽⁵⁾に築造された前方後円墳であり、三連三葉文環頭大刀、馬冑、蛇行状鉄器、鉄製輪燈、銅製八角稜鈴、銅鏡など、多くの渡来系遺物が出土していることでも知られている。

高靈地域を中心に分布する大加耶系土器は、5世紀後半頃から居昌地域、咸陽地域、南原地域など、大加耶の西側へと広く拡散していく。さらに6世紀代になると、宜寧地域、晋州地域、固城地域、昌原地域、咸安地域、順天地域など加耶の南部地域にも広がっていく(第3図)(パクスンギュ2010)。このうち蟾津江流域の南原地域には5世紀末頃から大加耶系土器が拡散していくが、在地系土器と共に存しつつ、変容した大加耶系土器もみられる。前述したように、伝・將軍山古墳出土長頸壺は、蟾津江流域における5世紀第4四半期～6世紀第2四半期の大加耶系土器である可能性が高いことからみて、5世紀後半以降に高靈地域から西側や南側に拡散していった大加耶系土器であるといえる。5世紀後半から6世紀前半にかけて蟾津江流域で出土する大加耶系土器の背景については、大加耶との政治的関係とみる見解と交流関係とみる見解に分かれている⁽⁶⁾。日本列島においては、5世紀後半頃から大加耶系文物の流入が増加しており、ちょうど大加耶の蟾津江への進出時期と一致している⁽⁷⁾。『日本書紀』繼體紀七～十年(513～516年)条に記された「己汶」と「帶沙」はいずれも蟾津江流域に比定されており、同じく繼體紀二十三年(529年)条に記された「多沙津」は蟾津江の河口に位置する河東地域に当たる。6世紀前半には百濟がこの地に進出してくるが、それまでは大加耶の対倭交易の重要な窓口であった(田中2009)。

一方、將軍山古墳出土の渡来系遺物をみると、一部に新羅系文物も含まれているが、その多くが加耶地域からもたらされたものではないかと考えられる。將軍山古墳の渡来系遺物のうち、

蛇行状鉄器については、6世紀前半の加耶古墳である水精峯2号墳で出土している。踏込部が幅広く滑り止めの突起をもつ鉄製輪鎧も6世紀前半の加耶古墳である景山里2号墳(慶尚南道宜寧郡)(チョヨンジエほか2004)や玉峯7号墳で出土しており、舶載品である可能性が高い。ちなみに景山里2号墳からは銅鏡も出土している。これらの加耶古墳からは大加耶系土器が出土しており、いずれも6世紀前半に大加耶系土器が拡散していく加耶西南部地域に当たることからみて、將軍山古墳の加耶系文物は大加耶との交流によってもたらされた可能性が高い。また、景山里2号墳では大加耶系土器とともに新羅系土器が共伴しており、6世紀前半に大加耶系土器が拡散していく地域では一定量の新羅系文物も出土している⁽⁸⁾。『三国史記』新羅本紀法興王九年(522年)条には大加耶王が新羅に使いを送り、婚姻関係を結んだことが記されており、6世紀前半に一時的にではあるが、大加耶と新羅が友好関係にあったことがわかる。このような関係を背景として、加耶地域に新羅系文物が多く流入してきたものと考えられる。したがって、將軍山古墳から出土している銅製八角稜鈴や棘葉形杏葉などの新羅系文物が加耶西南部地域からもたらされた可能性も否定できないだろう。このように考えると、伝・將軍山古墳出土長頸壺についても、これらの加耶系・新羅系文物とともに加耶西南部地域から日本列島にもたらされた可能性は十分にありうる。

おわりに

以上、伝・將軍山古墳出土の長頸壺を紹介するとともに、その系譜と年代、歴史的意義について考察した。その結果、伝・將軍山古墳出土長頸壺は大加耶系陶質土器であるが、大加耶の中心地である高靈地域ではなく、その南西側の地域、とくに蟾津江流域の大加耶系土器に系譜が求められることがわかった。また、その年代については5世紀第4四半期～6世紀第2四半期と推定され、大加耶系土器が拡散する時期に該当する。したがって、年代的には將軍山古墳の出土品であるとしても大きな矛盾はないといえる。仮に將軍山古墳出土品であるとすると、將軍山古墳で共伴している加耶系・新羅系文物とともに加耶西南部地域からもたらされた可能性が高いことを指摘した。

伝・將軍山古墳出土の長頸壺は入手経緯が不明であり、將軍山古墳から出土したものであるとは必ずしもいいきれない。しかし、將軍山古墳で出土している他の加耶系文物と合わせて考えると、將軍山古墳から出土した可能性も否定できない。なお、將軍山古墳の渡来系文物にみられる6世紀代の倭と加耶の交流関係については、『史跡埼玉古墳群総括報告書Ⅰ』で考察する予定である。

付記

本稿のうち、1～3は佐藤が、4・5は高久が執筆した。

本資料の紹介にあたり、明治大学博物館には資料調査、実測、撮影等、多大なるご協力をいただいたことを改めて感謝いたします。また、以下の方々にもご教示・ご協力をいただきました。文末ではありますが、記して感謝の意を表します。

李東熙、忽那敬三、申敬澈、崔景圭、朴升圭(五十音順、敬称略)

《註》

- (1)発掘調査の書類は提出したが、記録によると石室石材を入手することが目的であったとされる。
- (2)ただし下記論文(栗原1961)では「將軍塚」の名称が用いられている。
- (3)末屹里1号墳例については、申敬澈氏のご教示による。
- (4)雲坪里M1号墳例については、李東熙氏のご教示による。
- (5)TK10型式新段階の年代については、6世紀中葉頃と推定されている(酒井2013)。
- (6)パクチョンスは大加耶系土器の分布圏と領域が同一であるとし、蟾津江流域を大加耶領域であると主張する(朴天秀2007)。これに対し、パクスンギュは蟾津江下流域の順天・麗水地域については大加耶との交流圏ととらえ、領域ではないとする(パクスンギュ 2010)。
- (7)白井克也は日本出土の大加耶系土器は、TK216～TK208型式期とMT15～MT85型式期の二時期に集中すると指摘する(白井2003)。いうまでもなく將軍山古墳の大加耶系文物は後者の時期に該当する。
- (8)小加耶(古自、久嗟)の首長墳である松鶴洞1号墳(慶尚南道固城郡)の1B-1号横穴式石室(6世紀前半)では、在地系の土器とともに大加耶系の長頸壺、新羅系の台付長頸壺、百濟系の蓋杯、倭系の須恵器が出土しており、1C号横穴式石室(6世紀中葉)では新羅系の棘葉形杏葉が出土している(シムボングンほか2005)。小加耶などの南海岸地域が東西南北交流の結節点として機能していた可能性が高い。

《図版出典》

第1図：明治大学博物館所蔵品 (埼玉県立さきたま史跡の博物館実測・撮影)	第3図4：ウンヨンジンほか1979
第2図1：シムボングンほか1992	第3図5：シムボングンほか1992
第2図2：リュチャンファンほか2012	第3図6：チョヨンジエほか1993
第2図3：イヨンジュほか2004	第3図7：パクサンオンほか2007
第2図4：イトンヒほか2008	第3図8：イヨンジュほか2004
第2図5：チヨンヨンネ1983	第3図9：シムボングンほか2005
第2図6：ユンドクヒヤンほか1989	第3図10：シンヨンミンほか2012
第2図7：パクサンオンほか2007	第3図11：イスンヨプ1999
第3図1：カクチャングンほか2001	第3図12：イトンヒほか2008
第3図2：パクスンホほか1998	第3図13：ユンドクヒヤンほか1989
第3図3：リュチャンファンほか2012	第3図14：チヨンヨンネ1983
	第3図15：カクチャングンほか1998

《引用・参考文献(五十音順)》

【日本文】

- 郭鍾詰 1988 「韓國慶尚道陶質土器の地域相研究－所謂高靈系土器を素材として－」『古代文化』第40巻第2号
- 栗原文藏 1961 「蛇行状鉄器出土の武藏將軍塚古墳」『埼玉研究』5 埼玉県地域研究会
- 埼玉県教育委員会 1997 『將軍山古墳 確認調査編』史蹟埼玉古墳群整備事業報告書
- 酒井清治 2013 『土器から見た古墳時代の日韓交流』同成社
- 酒井清治 2014 「古墳と須恵器」『シンポジウム 埼玉古墳群の謎－東国を治めた古代豪族－』さきたま魅力アップ実行委員会
- 定森秀夫 1987 「韓國慶尚北道高靈地域出土陶質土器の検討」『岡崎敬先生退官記念論集 東アジアの考古と歴史 上巻』同朋社
- 定森秀夫・吉井秀夫・内田好昭 1990 「韓國慶尚南道晋州水精峯2号墳・玉峯7号墳出土遺物－東京大学工学部建築史研究室所蔵資料の紹介－」『朱雀』第3集
- 柴田常恵 1905 「武藏北埼玉郡埼玉村將軍塚」『東京人類學會雜誌』231 東京人類學會
- 白井克也 2003 「日本における高靈地域加耶土器の出土傾向－日韓古墳編年の並行関係と暦年代－」『熊本古墳研究』創刊号

- 関野貞ほか 1916 『朝鮮古蹟図譜』第三冊、朝鮮総督府
- 田中俊明 2009 『古代の日本と加耶』日本史リブレット70、山川出版社
- 東京国立博物館 1986 『東京国立博物館図版目録 古墳時代編(関東Ⅲ)』
- 藤野一之 2016 「土器からみた埼玉古墳群の葬送儀礼とその特質」『埼玉考古』51埼玉考古学会
- 朴天秀 2007 『加耶と倭－韓半島と日本列島の考古学－』講談社
- 森本尚子・忽那敬三・山路直充 2014 『明治大学博物館所蔵 前場幸治コレクション資料目録』

【韓国文】

- イドンヒ (이동희 李東熙) ほか 2008 『順天 雲坪里 遺蹟 I』 學術資料叢書第60冊, 順天大學校博物館
- イスンヨプ (이순엽 李順葉) 1999 「麗水 美坪洞 평지 出土 土器類」 『順天大博物館誌』 創刊號
- イヒジュン (이희준 李熙濬) 1994 「고령 양식 토기 출토 고분의 편년」 『嶺南考古學』 第15號
- イヨンジュ (이영주 영주) ほか 2004 『山淸 明洞遺蹟 II』 調査研究報告書第23冊, 慶南發展研究院 歷史文化센터
- ウジナム (우지남 禹枝南) 1987 「大伽倻古墳의 編年 - 土器를 中心으로-」 『三佛金元龍教授停年退任紀念論叢 I - 考古學篇-』 三佛金元龍教授 停年退任紀念論叢刊行委員會
- 国立晋州博物館 (국립진주박물관) 1985 『거창말흘리고분』 국립진주박물관
- カクチャングン (곽장근 郭長根) ほか 1998 『長水 三顧里 古墳群』 群山大學校 博物館
- カクチャングン (곽장근 郭長根) ほか 2001 『鎮安 龍潭댐 水沒地區內 文化遺蹟 發掘調査 報告書 IV』 學術叢書23, 群山大學校博物館・韓國水資源公社
- キムドウチヨル (김두철 金斗喆) 2001 「大加耶古墳의 編年 檢討」 『韓國考古學報』 45
- シムボングン (심봉근 沈奉謹) ほか 1992 『昌寧校洞古墳群』 古蹟調査報告書 第21冊, 東亞大學校 博物館
- シムボングン (심봉근 沈奉謹) ほか 2005 『固城松鶴洞古墳群- 第1號墳 發掘調査報告書-』 古蹟調査報告書 第37冊, 東亞大學校 博物館
- シンヨンミン (신용민 辛勇旻) ほか 2012 『河東 花心里 旱田遺蹟 河東興龍里古墳群』 發掘調査報告書第55 · 59輯, 東亞細亞文化財研究院 · 부산지방국토관리청
- チエインソン (최인선 崔仁善) ほか 2003 『麗水 鼓樂山城 I』 地方文化叢書 第44, 順天大學校博物館 · 麗水市
- チョヨンジエ (조영제 趙榮濟) ほか 1993 『陜川 玉田古墳群IV-M4 · M6 · M7 號墳-』 調査報告第8輯, 慶尙大學校博物館
- チヨヨンジエ (조영제 趙榮濟) ほか 2004 『宜寧 景山里古墳群』 研究叢書 第28輯, 慶尙大學校博物館
- チヨンヨンネ (전영래 全榮來) 1983 『南原, 月山里古墳群發掘調查報告』 圓光大學校 馬韓 · 百濟文化研究所
- パクサンオン (박상언) ほか 2006 『山淸 坪村里遺蹟』 調査研究報告書第48冊, 慶南發展研究院 歷史文化센터
- パクサンオン (박상언) ほか 2007 『山淸 坪村里遺蹟 II』 調査研究報告書第54冊, 慶南發展研究院 歷史文化센터
- パクスンギュ (박승규 朴升圭) 2003 「大加耶土器의 擴散과 관계망」 『韓國考古學報』 49
- パクスンギュ (박승규 朴升圭) 2010 『加耶土器 樣式 研究』 東義大學校 大學院 史學科 文學博士學位論文, 東義大學校大學院
- パクスンギュ (박승규 朴升圭) 2012 「‘대가야토기’에 대한 연구현황과 과제」 『대가야사연구의 현황과 과제』 대가야박물관 · 계명대학교 한국학연구원
- パクスンホ (박순호) ほか 1998 『咸陽 白川里 遺蹟』 研究叢書 第21輯, 釜山大學校博物館
- パクチョンス (박천수 朴天秀) 1998 「大伽耶圈 墳墓의 編年」 『韓國考古學報』 39
- パクチョンス (박천수 朴天秀) 2010 『가야토기 - 가야의 역사와 문화-』 진인진
- ユンドクヒヤン (윤덕향 尹德香) ほか 1989 『斗洛里 發掘調查報告書』 學術叢書2, 全北大學校 博物館
- ユンヨンジン (윤용진 尹容鎮) ほか 1979 『大伽倻古墳發掘調查報告書』 高靈郡
- リュチャンファン (류창환 柳昌煥) ほか 2012 『거창 말흘리고분군』 調査研究報告書第94冊, 慶南發展研究院 歷史文化센터